JAPANESE FOR FOREIGNERS

外国人のための日本語 例文・問題シリーズ 9

文体

ぶんたい

STYLE

監修＝名柄 迪

■名柄 迪■茅野直子 著

Innovative Workbooks In Japanese

荒竹出版

外国人のための日本語 例文・問題シリーズ 9

文　　体

名 柄 迪
茅 野 直 子
共著

江苏工业学院图书馆
藏书章

荒 竹 出 版

著者紹介

名柄 迪（ながら・すすむ）

1955年広島大学教育学部外国語教育学科卒業。59年同大学院修士号，69年ウィスコンシン大学で言語学博士号を取得。現在，ミシガン大学名誉教授，上智大学比較文化学部教授，同日本語日本文化学科科長。著書に，『形式名詞』（共著，荒竹出版），*Japanese Pidgin English in Hawaii, A Bilingual Description* (University Press of Hawaii), *Handbooks to Action English*, Vols.1-3 (World Times of Japan) 他がある。

茅野直子（ちの・なおこ）

1976年青山学院大学日本文学科博士課程修了。ハワイ大学大学院東西センターで言語教授法を学ぶ。現在，上智大学比較文化学部，国際教育振興会日本語研修所講師。著書に，『副詞』（共著，荒竹出版）All About Particles（講談社インターナショナル），『実践日本語教授法』（共著，バベル・プレス）他がある。

外国人のための日本語例文・問題シリーズ9

文体

平成元年七月五日　初版
平成八年四月十二日　三刷

著者　名柄迪　茅野直子
発行者　荒竹勉
印刷／製本　中央精版印刷
発行所　荒竹出版株式会社
東京都千代田区神田神保町二―一〇
郵便番号一〇一
電話〇三―三二六二―〇二〇二
振替（東京）二―一六七一八七

（乱丁・落丁本はお取替えいたします）

ISBN4-87043-209-9　C3081

© 名柄迪・茅野直子　1989　Printed in Japan

監修者の言葉

このシリーズは、日本国内はもとより、欧米、アジア、オーストラリアなどで、長年、日本語教育にたずさわってきた教師三十七名が、言語理論をどのように教育の現場に活かすかという観点から、アイデアを持ち寄ってできたものです。私達は、日本語を教えている現職の先生方に使っていただくだけでなく、同時に、中・上級レベルの学生の復習用にも使えるものを作るように努力しました。

このシリーズの主な目的は、「例文・問題シリーズ」という副題からも明らかなように、学生には、今まで習得した日本語の総復習と自己診断のためのお手本を、教師の方々には、教室で即戦力となる例文と問題を提供することにあります。既存の言語理論および日本語文法に関する諸学者の識見を無視せず、むしろ、それを現場へ応用するという姿勢を忘れなかったという点で、ある意味で、これは教則本的実用文法シリーズと言えるかと思います。

従来、文部省で認められてきた十品詞論は、古典文法論ではともかく、現代日本語の分析には不充分であることは、日本語教師なら、だれでも知っています。そこで、このシリーズでは、品詞を、自立語では、動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞、副詞、接続詞、数詞、間投詞、コ・ソ・ア・ド指示詞の九品詞、付属語では、接頭辞、接尾辞、（ダ・デス、マス指示詞を含む）助動詞、形式名詞、助詞、助数詞の六品詞の、全部で十五に分類しました。さらに細かい各品詞の意味論的・統語論的な分類については、各巻の執筆者の判断にまかせました。

また、活用の形についても、未然・連用・終止・連体・仮定・命令の六形でなく、動詞、形容詞ともに、十一形の体系を採用しました。そのため、動詞は活用形によって、u動詞、ru動詞、行く動詞、来る動詞、する動詞、の五種類に分けられることになります。活用形への考慮が必要な巻では、巻頭に活用の形式を詳述してあります。

シリーズ全体にわたって、例文に使う漢字は常用漢字の範囲内にとどめるよう努めました。項目によっては、適宜、外国語で説明を加えた場合もありますが、説明はできるだけ日本語でするように心がけました。

教室で使っていただく際の便宜を考えて、解答は別冊にしました。また、この種の文法シリーズでは、各巻とも内容に重複は避けられない問題ですから、読者の便宜を考慮し、別巻として総索引を加えました。

私達の職歴は、青山学院、獨協、学習院、恵泉女学園、上智、慶應、ＩＣＵ、名古屋、南山、早稲田、国立国語研究所、国際学友会日本語学校、日米会話学院、アイオワ大、朝日カルチャーセンター、アリゾナ大、イリノイ大、マサチューセッツ大、メリーランド大、ミシガン大、ミシガン州立大、ミドルベリー大、ペンシルベニア大、スタンフォード大、ワシントン大、ウィスコンシン大、アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター、オーストラリア国立大、と多様ですが、日本語教師としての連帯感と、日本語を勉強する諸外国の学生の役に立ちたいという使命感から、このプロジェクトを通じて協力してきました。

国内だけでなく、海外在住の著者の方々とも連絡をとる必要から、名柄が「まとめ役」をいたしましたが、たわむれに、私達全員の「外国語としての日本語」歴を合計したところ、５８０年以上にも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

及びました。この600年近くの経験が、このシリーズを使っていただく皆様に、いたずらな「馬齢の積み重ね」に感じられないだけの業績になっていればというのが、私達一同の願いです。

このシリーズをお使いいただいて、Two heads are better than one.（三人寄れば文殊の知恵）とお感じになるか、それとも、Too many cooks spoil the broth.（船頭多くして船山に登る）とお感じになったか、率直な御意見をお聞かせいただければと願っています。

この出版を通じて、荒竹三郎先生並びに、荒竹出版編集部の松原正明氏に大変お世話になりましたことを、特筆して感謝したいと思います。

一九八七年　秋

ミシガン大学名誉教授
上智大学比較文化学部教授　名柄　迪

はしがき

古来、東洋には「文は人なり」という諺があります。単にきれいな字を書く以上に、簡潔な文章、相手にわかりやすい文体で、自分の言いたいことを表現する能力は、昔から尊重されてきました。残念なことに現在の日本の高等教育では、こういう文を書く実践面の教育は、ほとんど無視されていると言ってよいと思います。初等中等教育の分野には、児童の発表能力を伸ばすために懸命に教育実践をしてこられただけでなく、他の先生方の指導にもあたられてきた、大村はま先生や野地潤家先生をはじめ、枚挙にいとまがない程の多くの先生方がおられます。しかし、私たちが承知している限りでは、国語国文関係の教員養成課程をのぞけば、良い文章を書く能力を養うことに力を入れている高等教育機関は、ほとんどないようです。これが、外国語としての日本語教育になると、状況はもっと悪いようで、むしろ、良心的に日本語教育の中に作文教育を取り込もうとした先生方が、「自分たちは、日本語を書くつもりはないから、難解な文献を読む練習にもっと時間を割いてもらいたい」という学生の声に負けて、「読解に多くの時間を割くことにした」という話をよく聞きます。木村宗男先生が『日本語教授法』の中で論じておられるような理想に近づく努力の第一歩も踏み出せなかった、いや、踏み出さなかったというケースが多いようです。

そこで、我々は、本著の中で、単に日本語の文体の種類や、さまざまな文体の特色を論ずるだけでなく、これからの日本語教育の中で文体を改善していくための効果的な方法を論ずることにしました。

このシリーズは、読者に中上級レベルの学習者を想定し、日本語教師の方々には現場で役に立つ例

文・問題を提示するのが目的ですから、序章では、文体の面から日本語の特色をどう見たらいいのか、外国の言語学者から日本語の論理構造はどう見られているかを概説し、日本語学習者と日本語教師に、私達が努力目標と考えていることを示すことにしました。第一章では、文体を、話し言葉、書き言葉、男女の性別、身分の上下による敬語使用などを考慮しながら区別し、文体の種類を読み分ける練習問題をそえてあります。第二章では、日本語の文体の特徴をつかむためのポイントを、前述したように日本語教授の面から論じました。

実践篇は、作文・小論文の書き方の練習です。ここでは、美しい文章を書くことより、文を読む人々に書き手の考えや主張が正しく伝わるような、簡潔で明瞭な文章作法を学ぶことを目的にしています。

ここで取り上げた内容は、実際に上智大学のコースで行ったカリキュラムに基づいています。このコースの対象は、帰国子女と呼ばれる日本人学生と、かなり日本語の学習をつんだ、外国人学生です。授業の進め方は、テーマ別にそれに関する本や参考資料を読んだり、テレビ番組を見たりした後、クラス内で討論し、最後にそれを作文にまとめるというやり方です。その模様はこの本には載せてありませんが、学生の作文の実例があげてあります。

学習者は、自分の興味のあるテーマについて、実例を参考にして書く練習をしてみてください。この本をお使いいただく先生方には、それぞれの学習目的に合わせ、足りない点を補ってお使い下さるようお願いします。

最後に、原文転載許可のお願いに対し、著作権者でおられる磯田美恵子、梅棹忠夫、頴原芳枝、岡田晋、唐木フサエ、北原隆太郎、木下是雄、金田一春彦、澤田昭夫、下村満子、高村規、俵万智、鳥羽欽一郎、堀多恵、三浦朱門、三好行雄、村上春樹、盛田昭夫、山口令子、与謝野光、エドウィン・

ラインゴールドの各氏、朝日新聞社、岩波書店、川端康成記念会、教育新聞社、国語学会、世界文化社、武蔵野書院、ユーホー通信社、労務行政研究所の各団体に御理解をいただき、快諾をたまわりましたことを記し、ここに特筆して感謝の言葉に代えたいと思います。

一九八九年六月二十五日

名柄迪
茅野直子

本書の使い方

本書は前半が理論篇、後半が実践篇と二つに分けて構成してあります。学習者は前半を通して、これまで学んできた様々の日本語の文体を、総合的に学習することができます。特に例文のあとにつけられている練習問題をしてみることにより、書き言葉と話し言葉、女性語と男性語、フォーマルとインフォーマルな表現の違いなどがはっきり理解できます。

後半の実践篇には、実際に作文を書く上で知っていなければならない事柄が記されています。その後にいくつかの課題による作文の書き方、及び実例があげてあります。実例についてのこまかい批評はしてありませんが、学習者はこの実例を参考にして、興味のある課題を選び、書く練習をしてください。

なお、手紙文の形式は、本シリーズ11『表記法』にあるので省きました。また後半の問題の解答は、一部を除き全て、本文に解説の形で書いてあります。

目　次

本書の使い方　xvii

理論篇（へん）

序　章　日本語の文体と論理構造の特色　……3

一　日本語の文体の特色　3

二　日本語の論理構造の特色　6

第一章　文体の種類　……9

一　書き言葉　9

1　文学作品の主なもの　9

2　文学作品とも、叙述文とも考えられるもの　12

3　学術論文　16

4　新聞　17

5　公文書・報告文・雑誌　26

二　話し言葉　30

1　日常会話　30

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2　改まった場面での話し言葉　38
三　書き言葉と話し言葉の相違点　44

第二章　学習上の文体認識の問題点　……47

一　代名詞の先行詞の確認　47
二　省略された部分の確認　48
三　倒置文の正置（語順の問題）　52
四　修飾語と被修飾語の関係の認識　53
五　慣用句の意味と使い方　56
六　ことわざの理解　63
七　呼応する表現の認識　65
1　否定形を伴う副詞の使い方　65
2　その他の表現　67
八　翻訳調の悪影響　69
九　場面における、日本語独特の言い方　71
1　挨拶の表現に関するもの　71
2　訪問の場合に使われる表現　72
3　その他の表現　73
一〇　大意の把握の仕方　74

実践篇

第一章　良い論文を書くための準備 …… 81

1　知識を豊かにするために　82
2　図書館の利用　82
3　新聞・雑誌の切り抜き　82
4　本の読み方　83
5　読書ノート　84

第二章　書き方のルール …… 85

一　表記上の注意点　86
1　記号について　86
2　数字の書き方　90
3　文字表記　91
二　原稿用紙の書き方　93
三　良い文を書くために　96
1　文の長さとパラグラフの長さ　96
2　文体の統一　98
3　語句の選び方　98

4　文章の書き方　100

第三章　論文のまとめ方　……103

一　アウトラインの作り方　104
二　パラグラフの立て方　106
1　パラグラフの長さ　108
2　パラグラフの内容　108
三　全体の構成　113

第四章　推敲と文章構成のチェック　……117

1　表記のチェック項目　117
2　文章のチェック項目　118
3　文章構成のチェック項目　118

第五章　項目別　作文演習　……121

一　紹介文　121
1　書く前の手順　122
2　紹介文の実例　122
二　依頼文と書簡文　125
1　書く前の手順　127

2 依頼文の実例 128
三 要約文 133
1 書く前の手順 140
2 要約文の実例 141
四 ブック・リポート（読後感） 142
1 書く前の手順 143
2 ブック・リポートの実例 143
五 入社論文 145
1 試験の前の準備 145
2 最近出題された論文のテーマ 146
3 小論文を書く時の注意 147
4 書く前の手順 148
5 入社論文の実例 148
六 報告文 151
1 書く前の手順 151
2 報告文の実例 152
3 授業の進め方についての補足 157
七 批判文 158
1 書く前の手順 158
2 批判文の実例 159

八　卒業論文の書き方　163
1　準備　164
2　書き方　164
九　参考書　165

別冊解答……巻末

理論篇へん

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com